最強の息子と最弱の親父

うぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強の息子と最弱の親父

【Ｎコード】
Ｎ６０００Ｚ

【作者名】
ういぃ

【あらすじ】
家が火事になってしまった息子礼二と、親父。生き残ろうとするが、あえなく二人とも死んでしまった。
と、気がついたら変な世界に来てしもた。
なんかドラゴンがおるし、どうなっとんねん！？

死んだはずやのに

家が火事になった。

唐突すぎる話だが、俺ん家が火事になっちまった。
何を考えたのか、俺は家中の漫画やゲームを持ち出そうとし、
親父は預金通帳や母親の写真を必死に握り締めていた。
慌てふためきよろめいて、ようやく玄関に辿り着いた頃に俺たちはすでに意識の限界に達してきていた。

「おや……じ……」

目の前が真っ暗になる寸前、親父は俺の手を掴み、意地でも持ち上げようとしている。
だが、あえなく親父も深い闇に意識を葬られ、二度と覚めない眠りへと落ちていった……。

ハズだったのだ。

……。

「え？」

目が覚めれば、そこは広大な大地に地平線が見え、山も点々とある世界だった。
サバンナか、アフリカか、と辺りの状況を必死になって頭に取り込もうとしていると、

「うぅ……母さん、礼二を守れんかった。許して……や……グガー」

親父が、なぜかゲームに出てくるみたいな戦士の格好をしているのだった。西洋が舞台になってそうな、そんな印象がある。

剃り残された髭が、戦士にしては小物らしさを引き立たせる。

寝言だか戯言だか、謝罪かも分からない声で呻いている親父の体を揺すった。

「起きてや親父。なんや、俺ら生きとんで！」

何度となく揺さぶって、ようやく自分の格好にも気がついた。

手の甲に、いや手の先から肩まで鉄板みたいな物が取り付けられている。

腰には、なにやら弱そうな細っこい剣がさしてあった。

「なんや……もうちょい寝かせて礼二……仕事行きとうないねん……」

「仕事ちゃうちゃう！！　周り、周りぃ！！」

顔を数発、力の限りにぶっ叩く。

「いてぇやろが！！」

痛みで覚醒した親父は、寝起き早々スゴい剣幕で俺に詰め寄ってきた。

これはマズいパターンだ。こうなると、親父は

「だいたい親のありがたみが分かっとらんねんお前は！！　少しぐらい遅れたって何も困らへん！！」

説教をし始めるのだ。
端は真っ当なことから、果ては的外れなことまで。とにかく、親父の気が済むまで説教を続けてくる。
そんな親父にはいつだって助けられてきたが、今回ばかりは反論したくなった。

「親父、周りよう見てみ」
「じゃかしぃ！！　親の説教に口挟まんでええんや！！」

いつの間にか正座をしている俺に、親父は格好のことも目に入っていないのか説教し続ける。
正座してしまうのはクセだ。いつも説教する時には「正座せい正座ァ！！」と怒鳴られるのだ。そういう習慣が出来てしまっていた。
親父の、ハゲてきたのを隠そうと短髪に切った髪が、ふわりと風で揺れた。

「だいたいいつもお前は……、あり？」

やっと事態が飲み込めたようで、まず止まるはずのない親父の説教が止まった。それほどまでに衝撃的な物なのだろうか。
まだ正座したままの俺の前で、親父はドンドン血の気が引いていき、顔を青くしていく。

「どうしたんや、親父」
「どら……どら……！」
「ドラえもんやったら、今日ちゃうやろ」
「ちゃうねん！　あれ、どら……どら……なんつったかな？　羽生えた恐竜みたいな奴」
「ドラゴンか？」
「それや！　ドラゴンが飛んどんねん！」

親父が俺の後ろを指差して、わなわなと震えている。
演技にしてはリアルだな。

「んなあほな」

と、半ばお笑いのコントのノリで振り返ると、

本当に背中から羽を生やした飛竜(ドラゴン)が飛んでいた。

「ほんまや」

これをお笑い番組か何かで見たならば、お客様全員の笑いが取れそうだと豪語しておく。
俺は空をばっさばっさと飛んでいる飛竜を見て、腰を抜かした。

「ほんまもんやんけ！！」
「だから言うたやろ！！」

親父のゲンコツが頭にヒットしても痛くないくらい、今の俺は驚愕していた。
ドラゴンは、大地を走る大きな動物に噛みつく。
血を吹き出しながらも動物は逃げようと必死に体を動かすが、余計にドラゴンの牙が食い込むだけだった。
捕食活動、親父とジェラシックパークっちゅう映画を見せてもらった時よりもリアルだった。

「あかん、ここおったらアカンて！」

俺と同じように腰を抜かしている親父をぶっ叩く。

「なにすんねん、どアホ！！」
「怒っとる場合ちゃうて！！」

まだ気づかれていないのが幸いだった。
抜き足差し足、と足音一つ立たせずにその場から去ろうと歩く。
抜き足……差し足……。
パキッ、という小枝を踏み折ったような音がした。

「ぐぅ？」

ドラゴンの喉から絞り出したような声がして、まず親父の足に目を向ける。
もちろんのこと、やはりというか、親父は小枝を見事に踏み抜いていた。
そして、次にドラゴンの方へと振り返る。

「ぶぅぐぅ」

と鼻を鳴らし、舌なめずりをするドラゴンを見て、

「逃げろぉぉおおおおおおおおおおお！！」

全力で走り出した。
親父が、横で「すまんすまん！！」と絶叫している。

「どアホはどっちじゃ糞親父！！」
「糞親父とはなんじゃドラ息子！！」

緊急事態だというのに、二人はお互いに睨み合い、立ち止まった。

ドラゴンがドタバタとこちらへ走ってくるのに目もくれず、両者は睨み合ったまま動かない。

「今度こそ言わせてもらうわ！！　親父はハゲじゃ！！　ハーゲ！！」

「ハゲちゃうわ！！　ダッサイ髪型しおって、女の子にモテへんぞ！！」

「関係ないやろが！！」

「ハゲも関係ないわ！！」

ドラゴンは、着実に迫ってきている。

「それになんや親父、ゲームのコスプレか！？」

「お前こそ変な格好すんな！！　いい加減にアニメやゲームから卒業しぃや！！」

「大人になっても止めませんけど？」

「近所の人に恥ずかしいから止めや！！　ほんまお前は」

「ぐるるるるるるる」

「「うっさいな黙っとけや……え？」」

他者の言葉に苛立った俺たちは二人同時に怒鳴り返そうとしたが、相手を見た瞬間に体が固まった。

ドラゴンの顔が間近にあったのだ。

また二人同時に目をパチパチと開閉させる。

「あ、はは」

親父と目配せをする。

目をキョロキョロとせわしなく動かし、両者同時に頷いた。

俺と親父はドラゴンに体ごと向けて、背筋を伸ばし、手も腰に置

いて、頭を下げた。

「「ほんまスイマセンでしたぁ」」

ドラゴンが首を捻った。どうやら、謎の行動に混乱しているのだろう。

またまた二人同時にきびすを返し、

「「ほなさいならぁぁぁあああああ！！」」

さっそく逃げ出した。

「おま、親父！！　囮になれや！！」

「誰がなるか！！　お前が餌になっとれ！！」

「中年太りし始めてるくせに何言うとんねん！！　ドラゴンさ～ん、この親父は肉が多くて美味しいですよ～！」

「なに言うとんねん親不孝もの！！　ドラゴンさん！！　うちの息子は若くてワシより美味しいですよ～！」

だが、ドラゴンは大口を開けて追ってくる。あれは「どっちも食ってやる」という顔だった。

ひぃぃっ、と二人して肩を跳ねさせ、更にスピードを上げて走る。もう息も切れそうだ。

運動不足の俺に、サラリーマンの親父。結果は見えている。

食われる。

二人とも、食われてしまう。

ザッ、と大地に足を留め、走るのを止める。

親父もその俺を見て、よろめきながらも足を止めた。

「なにする気や！？」

「戦うんやろ！！」

そう言って、俺はショボい剣を引き抜く。重量感も少なくて、力の無い俺でも簡単に持てた。きっと威力も低いだろう。

それでも、戦わなければ死ぬ。

「待ちぃや、礼二」

剣を構えようとした俺の前に、親父が立った。

親父も腰の剣を引き抜き、腰の引けた弱々しい構えをとる。

「あんな、ワシぃ、母さんに言ったんや。死んでも礼二を守るってな」

その言葉で、火事になった時のことを思い出した。

意識が無くなる寸前まで、俺が生きることに尽力を尽くした父の姿が今でもはっきりと思い出せる。

母さん……、俺が幼い頃に死んでしまったから、ほとんど覚えていない。

唯一の形見である母さんの写真だけが、俺と母さんとの繋がりだった。

涙が流れそうになったのをこらえて、親父の隣に立つ。

「死ぬには早いやろ？」

「礼二……」

「親父に先ぃ死なれたんやったら、後の俺はどうなんねん。意地でも天寿を全うさせてやんで」

「ひぐっ……礼二ぃ……」

嗚咽を漏らし、親父がボロボロと泣き出した。

そんな親父に俺は、ふっ、と笑い、

「泣くんは後や。生き残ってからやったら、十分泣けるやろ？」

「ああ、そうやな……」

そして、親父は涙を拭った。

その親父の顔が、今までに見たこともないほど凛々しく、格好良かった。

ドラゴンが俺たちの前で立ち止まり、まるで品定めするかのように、俺たちを交互に見ている。

「往生せぇやぁ！！」

初戦闘やで（前書き）

親父のセリフには、たまに作者の父親の口癖が入ります

初戦闘やで

ドラゴンに向かって、親父が駆け出した。
まるで反抗するつもりのないドラゴンは、動かずに、じっと迫る親父を見つめている。

「でやぁ！！」

親父の剣がドラゴンの額を叩いた。

「あひん！！」

と、親父は情けない声を出して、堅いドラゴンの皮膚に剣を押し返されていた。
それでも負けずに剣を振り下ろす。

「ぎゃっ！！」

悲鳴が上がり、バキン、という何かが砕けるような音がした。
俺の足元に、ザクッ、と刃物が降ってきた。

「ひっ！」

それは爪先まで数センチの距離で、俺は尻餅をついて倒れる。
アニメか漫画か、普段なら笑って見るワンシーンなのだが、いざ当事者になってみると全く笑えない。
倒れた体を起こして親父を見ると、先の折れた剣を無心に振り続けていた。目を閉じているせいなのだろう。

「死ねや！　はよ！　おら！　せい！」

声だけは一人前な戦士は、ドラゴンの鼻息で簡単に吹き飛ばされた。

俺の横をゴロゴロと転がる親父を尻目に、弱そうな剣を構える。

「ヤバいて、マジで……」

中年とはいえ、大人の力でビクともしなかったドラゴンに、果たして握力が両手を合わせて「１５」しか無い程度の俺は勝てるのだろうか。

力に握力は関係ない、とか誰かが言っていた気もするが、そうだとしてもドラゴンの堅い皮膚の前に、剣がすっぽ抜けてしまう姿が容易に想像できる。

それでも、このワケの分からない夢みたいな世界で親子もろとも死なないために、勝たねばならない。

「……アニメで見たんや。剣を水平に構え、上半身だけを後ろに向かって捻り」

言った通りに動く。腰や肩に、何か熱い感覚が昇ってくる。

そのまま、はぁー、と息を吐き出し、

「捻った反動と、剣を振る速度を合わせて、相手を一刀両断する……」

ぶつぶつと呟くだけの俺を見て観念したと思ったのか、ドラゴンが顔を近づけ、大きく口を開ける。

俺の体中に、何か大きな物が集まってくるのを感じる。満たされていく感覚だ。

俺は一気に全てを解放した。

「神・速・斬！！」

体の捻りを戻し、そのスピードのまま剣を水平に薙ぎ払う。

「ぐぅ？」

しかし、傷を負わせるどころか、当たってすらいなかったみたいだ。剣はすでにドラゴンの顔を、左から右へと通り過ぎていた。

ドラゴンは、俺が何をしたのか分からず、動きを止めている。

俺が、カチン、と剣を腰に納めた、その時だった。

ズドッ、という爆発音のような物のあと、ドラゴンを中心とした地面が、大きく抉れた。

時間が追いついていないかのように、そのすぐ後にドラゴンの体中に無数のキズが一瞬で付けられていた。

うめき声をあげたドラゴンは、白目を向いて横に倒れた。

ふぅ、と一息ついたあと、

「この技は、何者よりも早い一撃でキズを負わせる物。ゆえに、時間さえも遅れてしまう」

決めゼリフを言った。

ゴロゴロと転がっていた親父が、格好良く決めた俺に近づいてきた。

ポカン、と口を開けたまま、目を丸くしている。

「れ、礼二……」

「ん？」

親父は口元が震え、呂律が回っていなかった。

「な、なんや、今の……？」

「なんか知らんねんけどな、自然に出来たんや」

「はぁ……」

納得したのか、していないのか。親父はマヌケな顔で、じっと俺を見つめている。

今まで見たことのない表情だ。

クスッ、と笑ってしまう。

「ここはゲームかなんかなんやろ？　それじゃなかったら、ドラゴンなんかおらんしな」

「ゲーム？　夢か？」

「夢やったら息切れへんやろ」

「そうやんな……」

「もしかしたら、俺ら、死んだせいで変な世界に飛ばされたんかもな……」

「……スマン」

低く、呟き、親父は謝った。

「な、なんで謝るねん？」

「ワシ、母さんと約束したって言うたやろ？　死んでもお前を守るってな。でも、死なせてしもた。もう母さんに顔向け出来ひん……」

「親父……」

俯いて、子供が泣くのを我慢しているみたいな親父は、ただ謝り続けた。
何度も、何度も、親父は謝っていた。
きっと、死んだ母さんに向かって言ってるんだろうことは、ガキの俺でも容易に理解できた。
十数年という歳月が経っても、守るべき約束。それはきっと、親父の、母さんへの愛の印なんだと思う。
だから、俺は小さくなってしまった親父の肩に、そっと手を置いた。

「親父、俺らまだ死んどらんやん。神様が、きっと俺らにチャンス与えたんや。死ぬな、ってな」
「あ、あぁ……ぁ」

親父は俯いたまま、腕でゴシゴシと顔を拭った。
泣いてたんだ。
急いで涙を拭ったのは、情けない姿を息子に見られたくなかったんだろう。

「よっしゃ！！」

元気な声と共に、親父は勢いよく顔を上げた。
まだ鼻水が出ている。

「こうなったら生きたんでぇ！　礼二はワシが守るんや！！」
「その意気や、親父！」
「そうとなったら出発や出発！　まずはどっか寝れるとこ探さんとな！」

すっかり上機嫌になった親父が俺の肩に手を回してきた。肩で抱

き合う。
それに俺もならい、まるで居酒屋から出てきた酔っ払い二人組みのような姿だった。
ガハハ、と大笑いしながら二人は進む。

「親父、そういえば」
「ん、なんや？」
「剣、折れてるけど、どうすんの？」
「しもた！！　やっば、やばいって！　守るどころか戦われへやん！！」
「やっぱ親父はアホや……」
「アホちゃうわ！！」
「アホちゃうかったらバカや！！　バーカバーカ！」
「親に向かってバカやと！？」
「なんや！！」
「なんやー！！」

その後、小一時間ほど俺たちは口げんかしていた。

……。

「とりあえず、何か武器持っといた方がエエで」
手ぶらのまま歩く親父があまりにも頼りなさそうに見え、武器を手に入れるために、そこら辺をうろちょろしていた。
無論、地平線まで見えるような場所に武器なんか落ちてはいない。
「この固そうな木の枝使うか？」

道端に落ちていた木の枝を拾い上げ、差し出す。
しかし、親父は顔をしかめて、ウーン、とうなっていた。
「なにが不満やねん」
腕を組んで、何か考えている親父に俺は苛立ちつつも言った。
「ワシがお前守んのに、なんでそこら辺の木の枝使わんといかんねん」
「剣を折っといて、よく言うわ……」
「今度は折らへんて！　ほら、礼二がドラミちゃんを倒した時も折れんかったし」
「すんごい変化球のボケ投げつけんな！　ドラゴンの下りでドラえもんが来るって構えとったけど、なぜドラミちゃんやねん！　あと、ドラミちゃん倒したらファンの人にぶっ殺されるわ！！」
「うっさいわ、のび太」
「メガネかけとらんし、似てないわ！！」
「分かったから、分かったから、な？」
親父が、まるで話を聞かない人を宥める時の口調で言ってきた。
ブルブルと震えながらも怒りを静める。こんなくだらないことで喧嘩してたら、これから先、身が保たない。
「にしても、エエなぁ礼二。剣、ちょっと貸してくれへん？」
合掌し、親父は言った。
「使うんちゃうやろな」
「使わへん使わへん。返すって、な？」

使わないなら貸す、としぶしぶ剣を差し出した。
親父は剣を腰に納めて、笑顔になる。俺はさっき拾った木の枝を持った。
本当に大丈夫なのか、とても心配だ。
「まあ、武器代わり手に入れたんやし、行くか」
「あぁ……そうやな……」
女心と秋の空、を体現したかのように、親父の気分がガラリと変わっていた。
よほど剣を持ったことが嬉しいのか、目の前の中年は鼻歌を歌う。
陽気に鼻歌を歌っている背中を追って、俺は歩いた。
「お、おい、礼二！」
「なんやねん、もう」
ウンザリしつつも親父が指差す方向を見ると、そこには三匹のウサギがいた。
だが、ウサギと呼べるのか分からないほど目つきが悪い。
「……ウサギの不良かいな？」
と、親父が呑気なことを言い、
「んなわけねーだろ」
と俺はツッコミを入れた。
不良、というのも合っている気がしないでもない。目つきが、完

全に悪巧みをする奴の目だったのだ。
突如、ウサギのうち一匹がこちらに襲いかかってきた。
「うぉっ！？」
間一髪で二人が避ける。
小さな体の割に、なかなか速かった。
「親父、コイツら敵やで……」
「分かっとんねんけど、ワシにウサギなんか、可哀想で殺されへ」
親父が言い終わる前に、先ほど突撃してきたウサギが親父の背中に体当たりした。
「なにすんねん糞ウサギがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
鬼神がごとき形相で、親父は背後を襲ってきたウサギめがけて剣を振り下ろした。
バキン、という嫌な音が、また響いた。
ウサギは見事に剣を避けており、親父の振るった剣は地面を叩いたのだ。
折れた刀身が宙を舞う。
「さっそく折りやがったぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ドスっ、と地面に刺さった刃が、妙に虚しさをかき立てる。
その刺さった刃を、親父はチラリと見たあと、

「……か、カタッ！　このウサギ固いわ、マジで、固い！　固すぎやから折れてもうたわ～。当たっとったのに残念やわ～」

演技を始めた。

切っ先の無くなった剣を落として、剣を振った右手をブンブンと振り回している。

「固くて痛いわほんま！　ジンジンする、いや、マジで！」

「ダイコン芝居やんけ！！」

「違うんやて！　これ、違う！　あのウサギがな！？」

「もうエエっちゅうねん！！」

未だに芝居をしている親父を放っておいて、俺は木の枝を持ち、構えた。

そんな姿を見て、あのヘタレと違うことが分かったウサギ達は、更に目つきを鋭くし、姿勢を低くした。

俺も、木の枝に意識を集中させる。

両者、完全に臨戦態勢だ。

「きゅっ！」

先に動いたのはウサギだった。

二匹が一斉に飛びかかり、俺の喉元に歯を向けてくる。

だが、

「遅い！！」

瞬時に二匹のウサギの頭に木の枝を叩き込む。

「き、きゅぅ……」

反撃されたウサギ達は、目を回して倒れた。
もう一匹も飛びかかる。
しかし、こちらも簡単に撃ち落とされる。

「みねうち、やで」

三匹のウサギは気絶してしまったようだ。
やろうと思えば、この三匹を挽き肉にも出来たはずだ。それをしなかったのは、俺の中にある良心のせいだろう。

「は、はぁ……。なるほど、木の枝も使いようやな……」

後ろでは、なにやら親父がふんふんと一人で頷いていた。

「さっさと出発しよ」
「あ、あぁ、そうやな」

親父が頷くのを止めて、こちらへと歩いてきた。
と、今度もまた、俺の後ろを指差す。

「見てみ、礼二！」
「また敵ちゃうやろな？」
「ちゃうちゃう、デッカいお城や！！」

言われた通りに、指差す方向へと目を向ける。

「んなっ……？」

さっきまで無かった場所に、とてつもなく大きな城があった。

いや、遠くに見えることから察するに、霧か靄かで隠れていたのだろう。今でも、かすかに見える程度だ。
嬉しそうに親父が声を跳ねさせる。
「ほら、行くで礼二！　早よう早よう！！」
「うん、あぁ……」
腕を掴まれ、引っ張られるように走り出す。
外壁があるのを見る限り、多分あれは国か何かだろう。
中は全てが城ではなく、城下町が広がっているに違いない。
寝るところどころか、飯にもありつけるかも知れない。

俺の人生は、山もなく谷もない、至って平凡な物だった。
いつも、どこかスリリングな世界に憧れていた。
そして、それが昨日の今日で、コレだ。
実感はまだ湧かないが、高揚感が胸を包んでいた。
ようやく俺の人生が面白くなってきやがった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6000z/

最強の息子と最弱の親父

2011年12月20日22時49分発行